

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 26 日現在

機関番号：82674

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24600032

研究課題名(和文) 地域在住の高齢者ボランティアを活用した小1プロブレムへの介入研究

研究課題名(英文) Study of support for 1st grade students at elementary school by the community-dwelling elderly

研究代表者

安永 正史 (Yasunaga, Masashi)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター(東京都健康長寿医療センター研究所)・東京都健康長寿医療センター研究所・研究員

研究者番号：00531419

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近年、学校現場において小学校入学当初に見られる不適応状況、いわゆる「小1プロブレム」対策として、地域在住の高齢者を学習支援ボランティアとして活用する上での役割と課題についてプログラムを実施することで明らかにすることを目的とした。プログラムの実施にあたっては新入生支援のためのマニュアルを作成し、それに基づく事前研修を行った。支援終了後に行った高齢者対象のフォーカスグループインタビューから明らかになった課題は、事前研修について「開始当初の不安」、「支援の範囲」、学習支援について「子どもの安全とボランティアの責任」、連絡・連携上については「学級担任との事前打ち合わせ」であった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to clear points for the community dwelling elderly to support 1st grade students at elementary school, where we recently have increasing cases that children can't adapt to the class in initial term of 1st grade in Japan. We made the manual in which the way to support 1st grade students was written, gave it to the participant, and put into practice by using it. We found out the three additional points to the manual from focus group interview to participants, (1) resolution for anxiety supporting children and difficulty to decide limit of it, (2) clarifying who is responsible for safety of children, (3) need for meeting before intervention between participant and teacher.

研究分野：子ども学

キーワード：世代間交流 高齢者ボランティア 新入生支援 小1プロブレム

1. 研究開始当初の背景

近年、学校教育では、小学校1年生が新学期を過ぎて落ち着かず、学習が成立しない、いわゆる「小1プロブレム」(新保 2010)が大きな問題となっている。東京都教育委員会が都内公立小学校の校長と教諭それぞれ1313名に行った「東京都公立小学校第1学年の児童の実態調査」(2009)によると、学校長の23.9%、教師の19.3%が不適応状況の発生を経験し、しかも、不適応状況は一度発生すると54.5%が年度末まで継続しているということが明らかになった。新保(2010)は、こうした「小1プロブレム」の発生要因として、(1)幼稚園、保育園、小学校(以下、幼保小)の連携など教育システムの問題と(2)家庭や地域など学校をとりまく社会的変化の2つを挙げている。

(1)の幼保小の「連携・接続」の問題は以前より教育システム上重要な課題として議論されてきた。2008年3月に公示された文科省の小学校学習指導要領と幼稚園教育要領は、こうした連携・接続の問題にこたえることを目的の一つとして改訂が行われている。これに先立って行われたお茶の水女子大学などの国立大附属幼稚園での教育実践では、幼稚園年長後半から小学校1年の夏休み前までの「接続期」カリキュラムの構築が試みられている(お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校 2006)。さらに、ここ数年で市区町村レベルでも実践が徐々に報告されつつある。しかし、未だに多くの幼保小の間に「対立にも似た文化の相違」(加藤ほか 2010)が存在し、その間の円滑なコミュニケーションが困難である様子が報告されている(ベネッセ 2007)。

一方、(2)の家庭や地域など学校をとりまく社会の変化とは、都市化、核家族化によって子育て環境が孤立し、未熟な子育てにならざるを得ないこと、経済的な格差の拡大による低所得層の子育て環境の悪化と貧困の連鎖が生じていること、子どもが安心して遊べる空間が地域から減ったことで遊びを通しての人間関係を作るトレーニングが不足しているなど、家庭や地域に今日生じている問題が挙げられる(新保 2010;加藤ほか 2010)。

(1)の教育システム上の問題に比べて、この(2)の社会的な変化については実践記録などがいくつか見られるが(たとえば、あおば学校支援ネットワーク)、学術レベルでの実践的な報告は、わが国においては、ほとんど見当たらないのが現状である。

米国には、「小1プロブレム」というとらえ方は見当たらないが、経済格差の拡大による子どもの貧困が教育、特に初等教育に与える影響は重大な問題と位置づけられ、日本より大規模かつ積極的な政策が1960年代半ばより取り組まれてきている。Experience Corps Study (FRIED et al. 2004)は、高齢者の健康づくり、学校と地域の連携という

視点から開始された研究であるが、貧困層が多く通う小学校の低学年に学力の遅れや問題行動のある子どものメンター(mentor)として高齢者を活用するプログラムとして開発・運用されたことから、(1)の教育システム上の問題の改善に効果をあげており、(2)の家庭や地域の問題についても高齢者によるこうした活動が貢献しうる可能性が示されている。

筆者らは、この Experience Corps Study をモデルに、高齢者ボランティア(以下、ボランティア)と子どもの世代間交流による相互の効果を調べることを目的とした介入研究“REPRINTS”(Research of Productivity by Intergenerational Sympathy)(藤原ほか 2008)を平成16年度より開始し、継続中である。当該研究の高齢者の主な活動は、米国とわが国との初等教育環境の違いや通常授業へのボランティア導入の難しさから、基礎的な学力の補償ではなく、幼保小などの教育施設で子どもたちを前に絵本の読み聞かせを行う世代間交流プログラムとして開発・運用された(詳しくは、安永ほか 2013)。したがって、高齢者の心身の健康維持、地域のソーシャルキャピタル醸成については、Experience Corps Studyと同様の効果を期待しつつ、子どもへの効果については図書・文学への関心を高めるとともに、高齢者への敬愛の念を深めることで若年世代の情操教育の一助になることなど異なる側面への働きかけが目指されることとなった(藤原ほか 2007; FUJIWARA et al. 2009; 藤原ほか 2010)。

このように基礎学力の補償としては導入されなかった“REPRINTS”プログラムであるが、研究スタートの時点で67名であったボランティアも現在では218名(2014年11月末)となり安定した組織活動が行われ、幼保小などの施設との信頼関係も深まっている。また、個々のボランティアの活動も広がり、同一学内の保育園から小学校へ、小学校から中学校へと継続的に同じ子どもに読み聞かせをすることで、学校施設を接点に地域に根ざした長期継続的な交流がボランティアと子どもの間で見られるようになった。さらに、活動の内容が多様化し通常授業に参加するボランティアが見られるようになった。例えば、協力校の一つでは、国語科や総合的な学習の時間を利用してボランティアが絵本の読み聞かせ法の指導を6年生に行う学習活動が行われるようになった。この授業ではボランティア2人が児童数人に対してメンターとしてグループ学習をサポートする形式で行われる(安永ほか 2010)。したがって、こうした授業を通して、ボランティアの中にはメンターとして経験を積む者も増えてきた。そこで、こうした経験を積んだ“REPRINTS”ボランティアを Experience Corps Study 同様に、小学校の低学年において学力の遅れや問題行動のある子どものメ

ンターとして活用するプログラムを開発することで、「小1プロブレム」対策としても応用できるのではないかとこの着想に至った。

2. 研究の目的

地域在住の高齢者を小学校の新入生支援ボランティアとして導入するプロセスを示すと共に、その運用上の問題点と意義を明らかにする。

プログラムの実施先である学校施設としては、すでに信頼関係のあるボランティアが担当するという点で安心して受け入れることができるであろう。一方、ボランティアとしては慣れた環境で経験や子どもとのつながりを活かした活動が出来るという点で参加しやすいであろう。さらに、新入生である子どもたちにおいては、幼稚園・保育園で顔なじみとなったボランティアが小学校で受け入れる側にいれば安心の材料になると推測される。

ただし、経験を積んだ“REPRINTS”ボランティアであっても、入学したての新1年生の学習支援・生活支援の経験は皆無である。そこで、本研究では、筆者らの別のプログラムにおいて開発・運用された新入生支援プログラムを既存のボランティアを活用して実施したプロセスを示すと共に、その運用上の問題点と意義をボランティアに対してプログラム終了後に行ったフォーカスグループインタビューの内容を基に報告する。

3. 研究の方法

(1) 調査対象

ボランティアは対象校の学校ボランティア・コーディネーター(以後、学校BC)の呼びかけに応じた地域在住の高齢者10名(男性2名、女性8名、平均年齢71.7±6.1歳:2014年4月1日の時点)であった。このうち、“REPRINTS”ボランティアは7名であった。3名は別のボランティアとして対象校に来ている高齢者であった。対象校での“REPRINTS”ボランティアの通常の活動形態は、2校時と3校時の中間休みと昼休みに週2回、ボランティアの呼びかけに応じて集まった児童生徒に図書室で絵本の読み聞かせ(15分程度)を行うというものである。新入生支援を行う対象児童は神奈川県川崎市内のA小学校1年生2クラスの59名(男子生徒28名、女子生徒31名)であった。

(2) 期間

2014年4月14日～5月9日の約4週間実施された。

(3) プログラム実施の概要

ボランティアに対して筆者らがプログラム開始の2週間前に、新入生支援のためのマニュアルを配布し事前研修(3時間)を行った。研修では新入生支援の必要性、学校への入り

方、予測される問題、支援の場面とそれに応じた支援の仕方、担任教諭や学校BCとの連絡・連携方法、担任教諭からの要望などの説明を行った。

支援の内容は場面を生活、学習、給食の3領域を設定して要点を説明した。例えば、生活場面では、始業前の持ち物の整理、教師の指示に戸惑っている児童への声かけと支援、体操服、白衣などの着脱時の支援、連絡帳など提出の支援、保健室、トイレなどへの引率、下校時の声かけが主な支援であった。学習場面では、担任の指示に従うように声かけと支援、ノートなど必要な道具の準備の支援、立ち歩いたり、落ち着きのない児童の支援、授業に集中するような声かけや支援、教室外での学習の際の引率と見守りが主な支援の内容であった。給食の場面では、給食の準備や配膳の見守り(基本的には6年生が支援するので、その様子を見ながら必要に応じて支援する)、時間内に食べられるように声かけ、励ましが必要な支援の内容であった。

その他、いずれの場面においても、困っている様子が子どもに見受けられた際には、まず子どものそばに行き安心してできるように優しく声をかけることとした。

担任教諭にもボランティアに対する事前説明の内容を伝え高齢者ボランティアの支援活動の範囲について確認を行った。新入生児童の父兄に対しては入学式後の保護者会において学級担任よりボランティアが入る旨伝えられた。ボランティアは学校BCによって希望に応じて日程調整された上で、土日を除く毎日1クラスに1名が配置され、朝の登校から下校までの時間、学級担任の指示を受けながら児童の学習の支援活動を行った。

学級担任とボランティア同士の連絡には連絡用のファイルを用意し、担任がその日の学習内容と支援の要望を当日朝までに記入し、高齢者はその指示に基づき活動すると共に、各時間の支援の内容と気づいた点のメモを記入することで両者の連絡を行う運営体制を作った。

(4) 分析方法

支援終了後の3ヶ月後にフォーカスグループインタビューを行った。インタビューは(1)事前研修、(2)学習支援上の困難事例、(3)連絡・連携上の問題点、(4)活動の意義の4つのテーマについて参加者それぞれに話してもらい(2時間程度)、ICレコーダーに記録した。その内容を文字におこした後、テーマごとに要点の整理を行った。

4. 研究成果

(1) 結果

①結果的に対応が困難なほど動きの激しい子どもがいなかったこと、全体的に大人しい学年であったこともあり、実際の支援活動は比較的問題なく行われた。しかしながら、事前研修に関係する支援上の問題点・課題とし

て、「開始当初の不安、支援の範囲」が挙げられ、ボランティアの言葉としては以下のように述べられた。

「説明会の時に、いろいろ説明を受けて、それで、見守ればいい、今子どもたちが何をしたいのかを察して、言葉掛けをすればいいというイメージで、(初回)に参りましたが、どこまでやってあげたらいいの？ 何を見守ればいいの？ 何をってというのが、とっても不安でしたね。」

②学習支援上の困難事例については、「子どもの安全とボランティアの責任」、「言葉遣い」、「学級担任が(高齢者)対応に慣れていた反面、急な指示もあり、対応に戸惑った」が挙げられた。ボランティアの言葉としては順に以下のように述べられた。

「一番困ったの、分かんなかったのは、後ろにいた男の子が、すごく椅子をね、ガタガタ、あの子がひっくり返って頭打ったときに、私の責任になったら困るなって。」

どこまでで止めといたらいいんだろうって。だから言いたしたら、ずっと言ってなきゃなんないし、でもそれ、言って直るもんじゃなから大目に見てなきゃいけない、大目に見すぎてひっくり返って頭を打ったら私のせいになるし、そこの加減はちょっと。」

「一番、あの、困るのは、幼児語を使われるんですよ、どこかで。それだけはね、やっぱり、あの一、前もってお願いしておくといいかもかもしれませんね。あの、『あんよ』とか言っちゃうんですよ。」

「先生が、私たちに慣れていらっしゃるのか、信頼して下さっているのか、なにか、こう、急をお願いされることがあって、最初はすごく緊張するというか、すっかり、舞い上がってしまっ。」

③連絡・連携上の問題点としては、「学級担任と打ち合わせをする時間の必要性」が挙げられた。ボランティアの言葉としては以下のように述べられた。

「(私たちが子どもにどのように接するべきか)は、先生がどうしてほしいかが問題だと思うし、もし来年やるのであれば、結局、白紙状態の私たちに、こういう形のイメージで先生は頼みたいと思ってるから、それをこうして下さってことがもうちょっと明確に言ってもらわないと、そこに行っても何をしたいのか、本音の話、分からないってことだと思うんですよ。」

④活動の意義としては、「子どもの教育活動に直接参加することの実感」、「これまで見る機会のなかった日常的な教育風景を見ることができた新鮮さ」が挙げられた。ボランテ

ィアの言葉としては順に以下のように述べられた。

「絵本の読み聞かせなどで学校に来る機会や子どもに接する機会があっても、これだけじっくりと接する時間を持つことはありませんでした。大変な面もあって、一日終わって帰るとどっと疲れが出る反面、充実感もありました。」

「自分の子どもするときにはね、父兄参観か何かの時に、学校に来て、授業を見てなんてことは多少はあったけれど、一日を通して見る機会はなかった。これだけ丁寧に子どもたちに接して下さっている先生の指導を見て、自分の子どもに対してもこうだったんだろうなと思うと感謝の気持ちでいっぱいになった。」

(2)考察

本研究では、筆者らの別のプログラムにおいて開発・運用された新入生支援プログラムを既存のボランティアを活用することの運用上の利点、問題点をボランティアに対してプログラム終了後に行ったフォーカス・グループインタビューの内容を基に報告する。ボランティア経験が豊富であり、施設の状況などにも慣れたボランティアが新入生支援として入ることで、担任教員との連携がスムーズに進む場面が随所に見られた。しかしながら、こうしたボランティアを活用し、事前説明を行っても、開始当初のボランティアの不安感が高く、学習支援活動が果たす責任の範囲や言葉使いなど、新入生支援に固有の活動の難しさが指摘された。また、多忙な小学校教員との打ち合わせの時間のとり方や連携のあり方などは、学校支援のプログラムに共通する課題である。

一方、充実感や学校教育への理解の深まりなど高齢者ボランティア自身の達成感も報告されたことは、本プログラムの互恵的な側面として大きな意義を持つと考える。

<引用文献>

- ①ベネッセ教育総合研究所(2009) 幼小連携の現状と課題、これからの幼児教育を考える、2009 春号、http://berd.benesse.jp/jisedaiken/booklet/pdf/booklet_04_2.pdf (参照日: 2015年1月5日)
- ② FRIED, L. P., CARLSON, M. C., FREEDMAN, M., et. al. (2004), A social model for health promotion for an aging population: initial evidence on the Experience Corps model., *Journal of Urban Health*, 81: 64-78.
- ③藤原佳典、渡辺直紀、西真理子、大場宏美、李相侖、小宇佐陽子、矢島さとる、吉田裕人、深谷太郎、佐久間尚子、内田勇人、新開省二(2010)、高齢者による学校支援ボランティア活動の保護者への波及

効果—世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム“REPRINTS”から—、日本公衆衛生雑誌、57：458-466

- ④FUJIWARA, Y., SAKUMA, N., OHBA, H., NISHI, M., LEE, S., WATANABE, N., KOSA, Y., YOSHIDA, H., FUKAYA, T., YAJIMA, S. and AMANO, H. (2009), Intergenerational health promotion program for older adults: “REPRINTS” the experience and its 21 months effects, Journal of Intergenerational Relationship, 7 : 7-39
- ⑤藤原佳典、渡辺直紀、西真理子、李相侖、大場宏美、吉田裕人、佐久間尚子、深谷太郎、小宇佐陽子、井上かず子、天野秀紀、内田勇人、角野文彦、新開省二 (2007)、児童の高齢者イメージに影響をおよぼす要因 “REPRINTS” 高齢者ボランティアとの交流頻度の多寡による推移分析、日本公衆衛生雑誌、54：615-625
- ⑥藤原佳典、西真里子、渡辺直紀、李相侖、吉田裕人、佐久間尚子、呉田陽一、石井賢二、内田勇人、角野文彦、新開省二 (2006)、都市部高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム “REPRINTS” の 1 年間の歩みと短期的効果、日本公衆衛生雑誌、53：702-714
- ⑦加藤美帆、高濱裕子、酒井朗、本山方子、天ヶ瀬正博 (2011)、幼稚園・保育所・小学校連携の課題とは何か、お茶の水女子大学人文科学研究、7: 87-98
- ⑧お茶の水女子大学附属幼稚園・小学校 (2006)、子どもの学びをつなぐ—幼稚園・小学校の教師で作った接続プログラム—、東洋館出版社
- ⑨新保真紀子 (2010)、就学前教育と学校教育の学びをつなぐ 小1プロブレムの予防とスタートカリキュラム、明治図書出版株式会社
- ⑩東京都教育委員会 (2009)、東京都公立小・中学校における第1学年の児童・生徒の学校生活への適応状況にかかわる実態調査：「公立小学校第1学年の児童の実態調査」の結果概要、http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/press/pr091112/pr091112_s.htm (参照日：2015年1月5日)
- ⑪安永正史、藤原佳典、渡辺直紀、大場宏美、西真理子、李相侖、矢島さとる、小宇佐陽子、佐久間尚子、深谷太郎、吉田裕人、村山陽、内田勇人、新開省二 (2010)、世代間交流プログラム REPRINTS-4. —交流による児童の高齢者イメージの変容—、日本公衆衛生雑誌、57(10)：295
- ⑫横井紘子 (2007)、幼小連携における「接続期」の創造と展開、お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要、4：45-52

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ①安永 正史・倉岡 正高・村山 陽・鈴木 宏幸・大場 宏美・藤原 佳典、地域在住の高齢者による小学校新入生支援活動の実践報告、日本世代間交流学会誌、(査読有)、5巻、2015、(印刷中)

[学会発表] (計2件)

- ①安永 正史・村山 陽・竹内 瑠美・大場宏美・藤原 佳典、地域在住の高齢者による小学校新入生支援活動の実践報告、第9回日本応用老年学会大会、2014.10.26、東京
- ②安永 正史、小1プロブレムの解消に向けた学校ボランティア活動、日本世代間交流学会第5回大会、2014.10.4、姫路

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

安永 正史 (YASUNAGA Masashi)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター (東京都健康長寿医療センター研究所)
東京都健康長寿医療センター研究所・研究員
研究者番号：00531419

(3)連携研究者

藤原 佳典 (FUJIWARA Yoshinori)

地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター (東京都健康長寿医療センター研究所)

東京都健康長寿医療センター研究所・研究
部長
研究者番号：50332367

倉岡 正高 (KURAOKA Masataka)
地方独立行政法人東京都健康長寿医療セン
ター (東京都健康長寿医療センター研究所)
東京都健康長寿医療センター研究所・研究員
研究者番号：50596848

(3)研究協力者

野中 久美子 (NONAKA Kumiko)
地方独立行政法人東京都健康長寿医療セン
ター (東京都健康長寿医療センター研究所)
東京都健康長寿医療センター研究所・研究員
研究者番号：70511260

村山 陽 (MURAYAMA Yoh)
地方独立行政法人東京都健康長寿医療セン
ター (東京都健康長寿医療センター研究所)
東京都健康長寿医療センター研究所・研究員
研究者番号：90727356

大場 宏美 (OHBA Hiromi)
地方独立行政法人東京都健康長寿医療セン
ター (東京都健康長寿医療センター研究所)
東京都健康長寿医療センター研究所・研究員
研究者番号：70565572